



## すみれ公園（西原1丁目）

昔

昭和43年



今



昭和43年、西原小学校の西側に完成したすみれ公園。約0.2haの園内にはブランコや砂場、回旋タワー、メリーゴーランドなどたくさんの遊具が設置されました。その多くは既に撤去されましたが、象の形をしたすべり台は何度も繰り返し修繕され、50年以上経った今でも、地域の子どもたちに親しまれています。



大正時代末期、笠野原台地6,300haの内2,800haが畑で、他は松林と茅野でした。

笠野原台地は、火山噴出物からなるシラス台地で保水性が低く、長年人々の居住を阻んでいた土地でした。  
大正時代までは「水のない不毛の地」とよばれ、その生活は非常に苦しく、大正3年の桜島噴火による降灰のため、畑地はさらに荒廃。第1次世界大戦後、食糧の自給自足の大切さを痛感する時代となった大正9年、県は笠野原台地の開発に着眼して「土地利用研究所（農事試験場鹿屋分場）」を設け、農業経営の研究に着手しました。

大正13年に耕地整理組合が組織され、真っ先に取り組まれたのが飲料水の確保。渇水期や干ばつ時などは往復7〜8kmも歩いて水を運搬していたこともあり、この問題を解決するため、昭和2年に上水道が整備されました。耕地整理は約10年の歳月をかけ昭和9年に完成。1区画を約3haに区切り、直線道路を縦横に通し、どの畑にも車が横付けできるようにしました。これにより、労力の削減、収穫量の増加、耕地の拡張など、笠野原は大きく発展しました。  
畑地かんがい事業が実施される以前は、サツマイモなどの干ばつに強い作物の栽培に限られていましたが、昭和42年に高隈ダムが完成し、国営第1号事業による本格的な畑かん営農が実施され、茶、サトイモ、キャベツ、花木等の作物が新たに栽培されるようになりました。現在では、全国有数の緑豊かな食料供給基地となっています。

「不毛の地」から「実りの地」へ

カノヤタイムトラベル